



きらきら Eyeランド

JA庄内みどり

安全・安心をお届けします。

令和3年2月10日

## グリーンプロジェクト情報 第1号

発行：庄内みどり農業協同組合  
協力：酒田農業技術普及課

# 令和3年産米の春作業が始まります 土づくりと健苗育成で高品質多収生産を！

令和3年産米の安定生産に向けた第一歩は健苗育成が前提となります。作業計画を確認し、適期移植で初期生育確保に努めましょう。

近年、夏の猛暑・高温といった気象変動により生育後半の稲の活力低下がみられます。天候に左右されない稲づくりを継続するために、積極的な土づくりで地力を向上させましょう。

## 令和3年度 水稲育苗作業計画

作業名	作業月日
塩水選	3月24日(水)~26日(金)
種子消毒	3月25日(木)~27日(土)
浸種	3月26日(金)頃 ※2週間程度までとし、必要以上に長くしない。
催芽	4月8日(木)~
播種	平坦4月10日(土)~15日(木), 中山間4月17日(土)~23日(金)
田植	平坦5月8日(土)~13日(木), 中山間5月15日(土)~21日(金)

春先は作業が集中します。正確な記録のため、農作業記録野帳への記帳を忘れずに！！

### 技、其の一 「ばか苗病」対策のポイント（共通事項）！

#### ■周辺環境

- ①作業場所やその周辺から伝染源となる稲わら、籾殻、米ぬか、粉塵等を除去し、十分掃除をする。
- ②昨年「ばか苗病」の発生が見られた場合は、種子消毒、浸種、催芽に使用する機器並びに容器等（桶、育苗箱、催芽機）はすべて「イチバン」（500~1,000倍液で瞬時浸漬または散布）等で消毒する。（催芽機を消毒する場合は希釈薬液を循環させる）また、マルチや有孔ポリは再利用せず更新する。

#### ■塩水選・種子の準備

①塩水選でより良い種子を！

品種	塩水選の比重	水10kg当たりの目安	
		塩(kg)	硫安(kg)
うるち	1.13	2.1	3.0

☆塩水選後は、水道水で良く洗い流しましょう。

☆温湯消毒をする場合は塩水選をしないで下さい。

- ②塩水選の際には、必ず採種地の確認をして、忘れずに産地・採種地ナンバーを生産記録書に記入しましょう。
- ③品種の混入に注意して下さい。  
※催芽袋での色分け、名札等でハッキリ確認できるようにしましょう。
- ④催芽袋への種子の小分けは種子量を5kgとし、催芽袋にゆとりを持たせるようにしましょう。

#### ■浸種・催芽

- ①浸種は、適温管理ができる屋内または日陰で行う。ハウス内での浸種は水温が高くなる傾向があるので絶対に行わない。また、直射日光による急激な温度上昇を避け、外部からの異物混入を防ぐため、容器には必ず「蓋(ふた)」をする。
- ②浸種桶には必ず温度計を設置し、水温を測る。
- ③浸種は、水温10~15℃未満を確保できるように3月26日頃から開始する。（酒田アメダス平年値で最高気温10℃を超える頃）また、水温が低い場合は開始時にお湯を加えて調整する。低水温（5℃以下）は発芽率低下を招き、高水温（15℃以上）は「ばか苗病」の発生リスクを高めます。
- ④浸種期間は積算水温120℃（10℃/日×12日間）までとし、必要以上に長くしない。浸種水量は種子が露出しないよう十分確保する。消毒方法の異なる種子は同じ容器で浸種・催芽しない。（詳しくは裏面参照）
- ⑤催芽温度は30~32℃とし、温度計で水温を確認する。（催芽温度が低いと「ばか苗病」の発生を助長させます。）

#### ■育苗管理

- ①育苗施設及び周辺では、生わら、籾殻を使用しない。
- ②生焼けのくん炭を育苗床土に使用すると「ばか苗病」が発生しやすくなるので、完全に炭化したものを使用する。
- ③育苗期間中の温度は、出芽時（30~32℃）、緑化期（昼：20~25℃、夜：10℃以上）、硬化期（昼：15~20℃、夜：5℃以上）を目安とする。温度が高いと「ばか苗病」の発生が多くなるので、温度管理を徹底する（「ばか苗病」の発生リスクが最も高い温度は27~30℃）。

## 技、其の二 薬剤による種子消毒の方法！

種子消毒剤にはテクリードCフロアブルを推奨します。

(※スポルタック乳剤は耐性のあるイネばか苗病菌が確認されておりますので、他の剤の使用を検討しましょう)

### ■テクリードCフロアブルの使用法

- ① 水温は 10℃以上～15℃未満を厳守する。(10℃未満の極端な低水温での浸種は催芽や出芽が遅延、抑制される場合があるので、お湯を加えるなどして水温を確保しましょう。)
- ② 太陽光が直射する場所では、薬液の温度が上がったり、薬剤成分が分解したりするため、屋内または日陰で行う。
- ③ 薬液量は、種子乾粒重の 2 倍以上の容量を準備し、「よくかき混ぜる」こと。(乾粒 10kg の場合、20ℓ 以上の薬液が必要。)
- ④ 薬液の倍率は、水 100ℓ に対し薬剤 500 ml の 200 倍を厳守し、2 4 時間浸漬する。(乾粒 50kg 分)
- ⑤ 薬液に浸漬する際は、催芽袋の一つ一つ中まで薬液が染み渡るように、3～4 回ゆすってから容器に沈め、2 4 時間浸漬する。
- ⑥ 消毒終了後は風通しの良い日陰で種粒袋を 2～3 日つるし、種粒の表面に薬剤が固着するまで乾かすと防除効果が高まる。(※例年、ばか苗病の発生が多い場合は実施する。)
- ⑦ 浸種は、種子乾粒の 2 倍の水道水 (10kg あたり 20ℓ ) に静かに浸す。薬剤効果の安定を図るために、浸種開始 3 日間は水の交換をしない。その後は 3 日に 1 回程度交換する。また、種粒に固着させた薬剤が落ちないように、水交換は静かに行う。
- ⑧ 浸種期間中に、循環式催芽機やエアーレーション付きの水槽などを使用すると、黒色の粘性物が発生する場合があるので使用しない (水を動かさない)。
- ⑨ 催芽機による「催芽」は、機械を過信せず温度計を設置し確認する。

**種子と一緒に配布されている『作業チェックリスト』を活用して「ばか苗病」の発生を未然に防ぎましょう！！**

## 技、其の三 温湯消毒種子の取扱方法！

- ① 温湯消毒後は直ちに水道水に浸種する。すぐに浸種できない場合は脱水した後、衛生的で風通しのよい冷暗所に広げて保管後、播種日から逆算し適切な時期に浸種を開始する。
- ② 浸種は、種子乾粒重の 3 倍以上の水道水 (10kg あたり 30ℓ 以上) とし、菌が増殖しないように、2～3 日に 1 回は水交換する。
- ③ 温湯消毒した時点の種子は無菌状態となっているが、その後の不衛生な管理や温度管理で「ばか苗病菌」が付着する可能性があるので注意する。
- ④ 温湯消毒と薬剤消毒を行った種子を併用する場合は「浸種・催芽・播種」は、別々に扱う。

※もち米は温湯消毒処理を行うと発芽率が低下する傾向があるので留意する。

## 技、其の四 気象変動に左右されない土づくりを！

水田の土壌 pH は土づくり資材の使用減少により年々低下してきています。pH の低下は稲わらの腐熟を遅らせ、田ワキの原因となり初期生育確保の妨げになります。また、近年は夏の猛暑・高温が常態化しており、特に地力が低い圃場での稲の消耗が激しく凋落が見受けられます。

当 JA では令和 2 年度から「土づくり支援対策」を行っております。下表の対象資材を活用し、積極的な土づくりで地力を向上させ安定多収をめざしましょう。

資材名	施用量 (kg/10a)	税込参考価格 (円/20 kg)	備考
農力アップ	60	1,254	ケイ酸・苦土・微量元素を含有した新総合土づくり肥料
天の恵み 14 号	100	935	ようりん と ケイカル が 同時 散布 できる 省力 銘柄。混合割合は、ようりん 1 (20%) : ケイカル 4 (80%)
てんろ石灰(粗粒)	100	726	ケイ酸や微量元素を含む。主に pH の矯正を目的とし効果の持続性が高い
とれ太郎	60	1,936	リン酸・苦土・ケイ酸・石灰を含んだ総合的な土づくり肥料。

※春散布の場合は耕起前までに散布しましょう。

★ 次号の発行は 3 月 1 0 日です！